

認可外保育施設で働く保育者がもつ 子どもに対するイメージの実態

林田 りか・中 淑子

Thought of Children Educator in non-approved nursery school

Rika HAYASHIDA and Yoshiko NAKA

要 約

無認可保育所で働く保育者71名に、子どものイメージについてアンケート調査を行った。①対象者の個人特性は、20代、既婚者、子どもの人数2人、4～10年の職務年数、有資格者が多く、施設特性は、事業所内保育所以外の施設や病児保育を実施していない施設で働くものなどが多かった。②子どものイメージ得点では、「興味ある」「かわいい」「好き」「楽しい」など肯定的なイメージの得点が高く、対象者が子どもに対して愛情をもって接していることが伺えた。③因子分析の結果5因子が抽出され、どの因子も子どもに対して肯定的なイメージをもっていた。④対象者の属性を比較した結果、第4因子の「お利口な子どもの因子」では対象者の年齢と子どもの人数、設置主体別、病児保育の有無で有意差がみられた。対象者の年齢が高くなるほど、また、病児保育を実施していない施設ほど、お利口な子どもとしてのイメージが強かった。

キーワード：認可外保育施設、子ども、イメージ、因子分析

はじめに

近年、わが国では核家族化や都市化の進展、高学歴化、女性の社会進出の増大、IT化などで、子どもに影響する環境の変化が大きく取りざたされるようになってきた。特に、少子化は重要な社会的問題であり、労働力人口の減少、経済成長の制約ばかりでなく、子どもの心身の発達に悪影響をおよぼしている。子どもに影響する問題は、児童虐待や殺人・暴力などの少年犯罪、心身症、小児成人病などがあげられる。それらは、年々増加傾向にある。このような、子どもをとりまく社会環境の変化とともに、我々が抱く子どものイメージも、年々変化しつつあると思われる。

子どものイメージに関する研究は、今まで数多く行われているが、その大半は看護学生を対象としたものである^{1)~10)}。教育・保育・保健・医療は、子どもたちの心身を健康に育てるために必要な社会基盤として、特に重要である。その中でも、子

どもの成長、発達の機会に多く接している保育者を対象としたイメージ調査は、未だ少ない。

本研究では、認可外保育施設で働く保育者がもつ、子どものイメージについて実態調査を行い、その中から、保育者との関連要因を明らかにする事を目的とした。

1. 保育施設の種類と定義

保育施設は保育白書（2001年）によると、認可保育所と認可外保育施設（以下、無認可保育所とする）に区分される。

認可保育所は、必要な保育士の数や施設の面積などを定めた「児童福祉施設最低基準」などの基準を満たしていることを、都道府県や指定都市、中核市から確認され、自治体から公費を受けて運営されている施設である。

無認可保育所は、子どもを預かる施設であり認可保育所でないものを総称している。その種類は

様々あり、中には、自治体から補助を受けている施設もあるが、一般的に施設の運営や設備などは、施設によって異なる。

無認可保育所には、事業所内保育施設（以下、事業所内保育所とする）やベビーホテル、託児所、夜間保育所などが含まれる。事業所内保育所は、企業や病院内に付設される保育所である¹¹⁾。

2. 研究方法

1) 調査対象

対象は、長崎市とその周辺地域の無認可保育所で働く保育者で、研修会に参加した者74名である。保育関連の研修終了後に参加者へ本研究の趣旨を説明し、協力依頼を行い、了解が得られた者に調査票を配布した。

2) 調査期間

平成13年1月

3) 調査方法

子どもに対するイメージの測定は、中¹²⁾の開発

した35項目の形容詞からなるSD法を用いた質問票を使用した。フェイスシートは、対象者の年齢や保育者としての経験年数、結婚の有無など15項目にわたり質問した。

分析方法は、7段階評価を行い、その得点をもとに、因子分析（Varimax回転）と信頼性の検討を行った。因子ごとの属性の比較には、因子得点を求め、属性ごとに平均値の差の検定（t検定）を行った。データ分析には、統計パッケージSPSS10.0Jを使用した。

3. 結果

1) 対象者の属性

長崎市とその周辺地域で働く保育者74名のうち、有効回答を得られたのは71名（有効回答率95.9%）であった。

対象者の属性を、個人特性と施設特性に分け図1、図2に示した。

対象者の年齢は20歳から51歳で、平均年齢は34.4（±10.0）歳である。個人特性では、対象者の年齢を年代ごとにみると、20代40.9%、30代

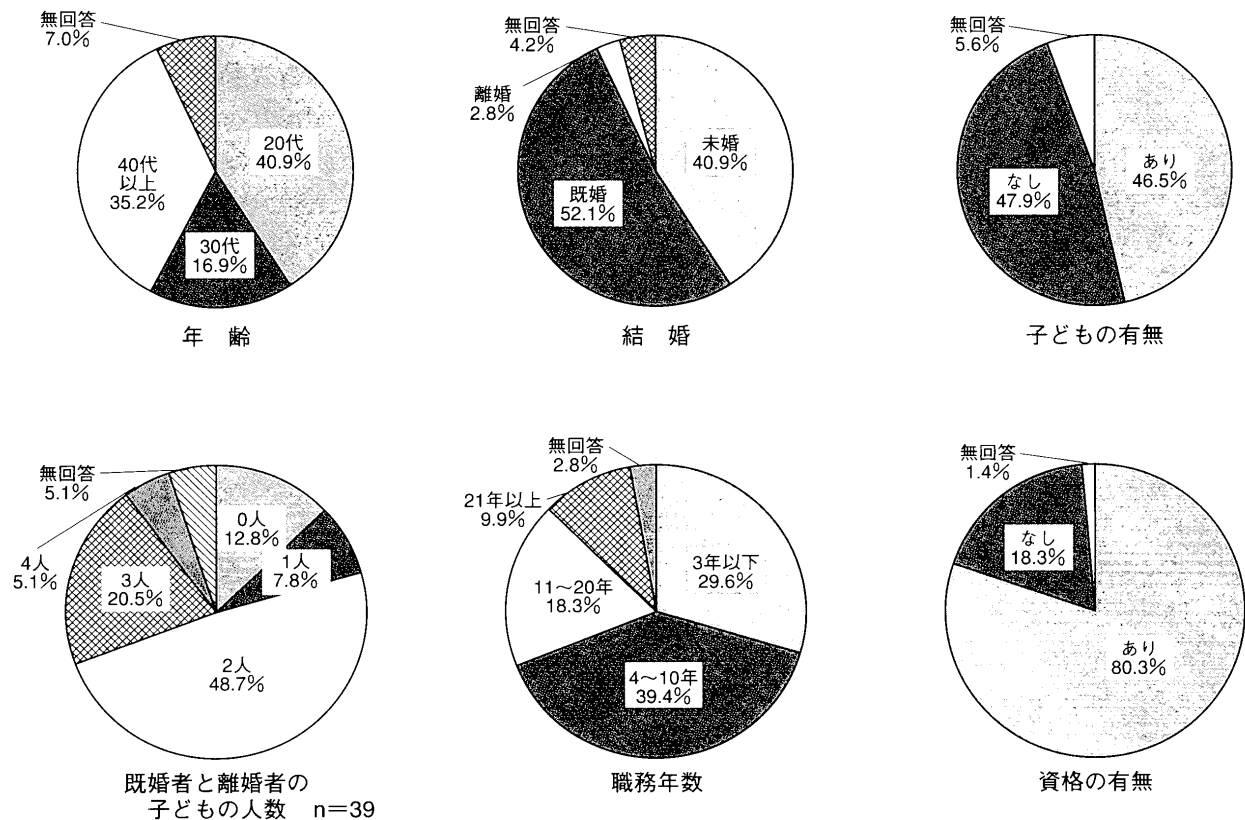


図1 対象者の個人特性

16.9%、40代以上35.2%であった。結婚の有無では、未婚者が40.9%、既婚者は52.1%と既婚者の方が多く、離婚者は2.8%であった。子どもの有無では、子どもをもつ者が46.5%、もたない者が47.9%であった。既婚者と離婚者がもつ子どもの人数では、1人7.8%、2人が48.7%と最も多く、次いで3人20.5%、4人5.1%、子どもをもたない者は12.8%であった。保育者としての職務年数では、3年以下29.6%、4～10年が39.4%と最も多く、11～20年は18.3%、21年以上9.9%であった。保育士の資格の有無では、有資格者が80.3%と大半を占め、無資格者は18.3%であった。

次に、施設特性をみると設置主体別では、無認可保育所で働く保育者のうち、事業所内保育所で働く者29.6%、その他の保育所で働く者67.6%であった。病児保育実施の有無では、病児保育を実施している施設は19.7%、実施していない施設は52.1%と半数以上を占めていた。延長保育実施の有無では、実施している施設が52.1%と多く、実施していない施設は22.5%であった。保育形態では、昼間保育（24時間未満の保育）施設が74.7%、夜間保育（24時間以上の保育）施設は21.1%であった。

2) イメージ項目の平均値の比較

イメージ項目別の平均値と標準偏差を求めグラフに示した（図3）。イメージの平均値の高い項目は、「20興味ある」、「26かわいい」、「19好き」、「8楽しい」などであり、平均値の低い項目は、「31安定した」、「32複雑な」、「16動物的な」などであった。7段階尺度の中央値である4点を境に、平均値が4以上の項目は34項目あり、4未満の項目は1項目あった。イメージ項目の総平均値は5.36点であり、イメージの平均値がそれより高い項目は17項目、低い項目は18項目あった。

3) 因子の検討

因子分析を行った結果、累積寄与率56.23%で5因子が抽出された（表1）。第1因子は、“柔らかい、暖かい、うつくしい、豊かな、好き、楽しい、あかるい、うれしい、愉快的な、きれい、賑やかな”で構成され、女の子をイメージする言葉が多く「女の子の因子」と命名した。第2因子は、“親しみやすい、興味ある、かわいい、動的な、積極的な”で構成され、好印象の子どもと解釈し「好感もてる子どもの因子」、第3因子は、“激しい、一時的な、派手な、動物的な、粗野な、軽

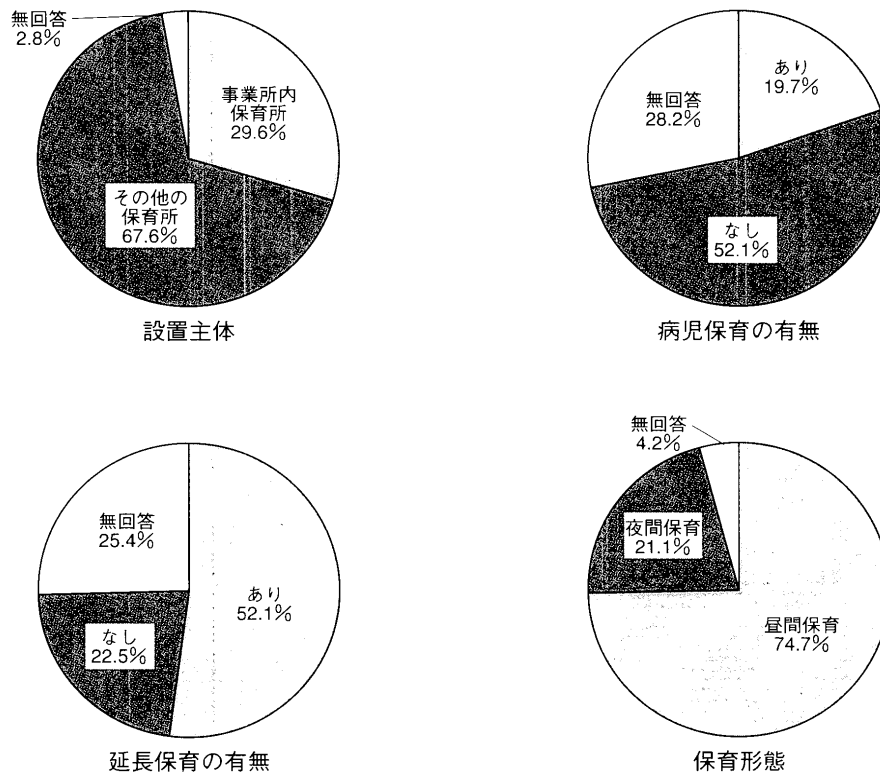


図2 対象者の施設特性

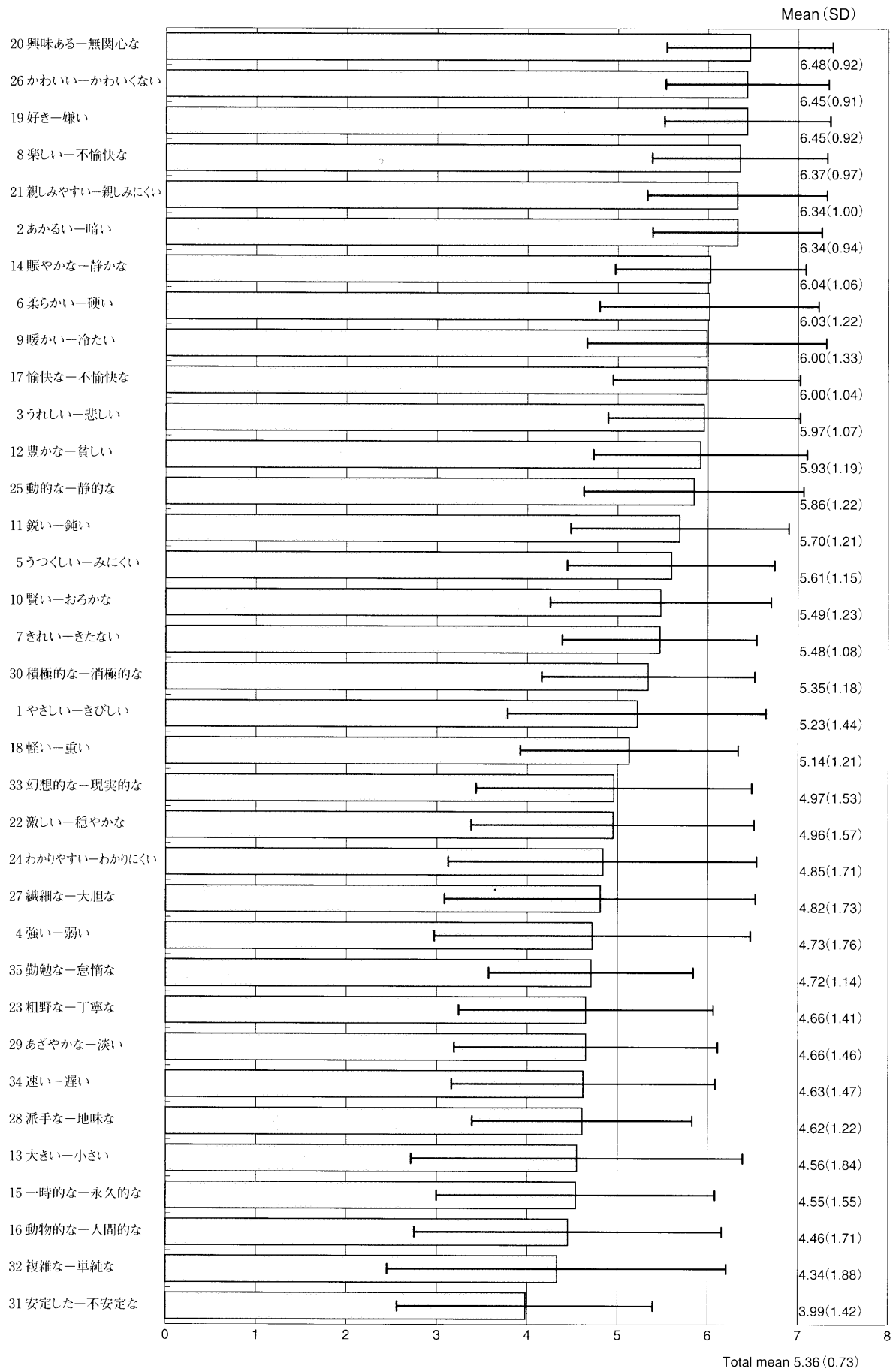


図3 イメージ項目別の平均値と標準偏差

表1 イメージ項目別の因子負荷量

イメージ項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	因子名
6 柔らかい-硬い	0.810	0.018	0.105	0.032	0.120	女の子の因子
9 暖かい-冷たい	0.732	0.292	-0.151	0.175	-0.093	
5 うつくしい-みにくい	0.673	0.088	-0.090	0.129	0.178	
12 豊かな-貧しい	0.655	0.420	-0.085	0.086	0.263	
19 好き-嫌い	0.651	0.535	-0.026	0.042	-0.058	
8 楽しい-不愉快な	0.630	0.156	-0.065	0.291	-0.286	
2 あかるい-暗い	0.623	0.382	-0.112	-0.149	0.042	
3 うれしい-悲しい	0.617	0.337	0.011	0.323	-0.027	
17 愉快な-不愉快な	0.572	0.531	-0.069	0.364	-0.204	
7 きれい-きたない	0.551	-0.031	-0.041	0.285	0.349	
14 賑やかな-静かな	0.531	0.134	0.117	-0.056	0.056	子どもの因子
21 親しみやすい-親しみにくい	0.276	0.747	0.033	0.249	-0.046	
20 興味ある-無関心な	0.257	0.737	-0.004	0.071	0.063	
26 かわいい-かわいくない	0.377	0.673	-0.144	0.250	-0.028	
25 動的な-静的な	0.268	0.605	0.197	0.029	0.158	
30 積極的な-消極的な	0.098	0.601	0.154	0.229	0.400	
22 激しい-穏やかな	0.031	-0.008	0.779	-0.069	0.311	
15 一時的な-永久的な	0.053	-0.274	0.735	0.099	-0.132	
28 派手な-地味な	-0.046	0.150	0.703	-0.008	0.132	
16 動物的な-人間的な	-0.204	-0.023	0.700	0.036	0.148	
23 粗野な-丁寧な	-0.047	0.013	0.679	-0.038	-0.059	
18 軽い-重い	0.109	0.219	0.677	0.067	-0.101	
35 勤勉な-怠惰な	0.097	0.080	-0.055	0.731	0.160	お利口な子どもの因子
34 速い-遅い	0.139	0.112	0.242	0.670	0.275	
24 わかりやすい-わかりにくい	0.055	0.294	0.009	0.595	-0.033	
10 賢い-おろかな	0.460	-0.008	-0.031	0.548	0.187	
31 安定した-不安定な	0.009	0.141	-0.110	0.529	0.252	
1 やさしい-きびしい	0.229	-0.056	0.288	0.461	-0.319	
4 強い-弱い	0.330	-0.075	0.086	0.080	0.761	
13 大きい-小さい	0.184	0.003	-0.087	0.281	0.704	
32 複雑な-単純な	-0.220	0.170	0.180	0.129	0.594	
29 あざやかな-淡い	-0.052	0.473	0.130	-0.009	0.484	
11 鋭い-鈍い	0.338	0.299	-0.070	0.276	0.407	
寄与率 (%)	16.45	11.76	10.21	8.98	8.83	
累積寄与率 (%)	16.45	28.21	38.42	47.40	56.23	

因子抽出法：主成分分析 回転法：バリマックス法

い”など、子どもの元気さが感じられるため「元気な子どもの因子」とした。第4因子は、“勤勉な、速い、わかりやすい、賢い、安定した、やさしい”など、世話をしやすくお利口な子どものイメージなので「お利口な子どもの因子」、第5因子は、“強い、大きい、複雑な、あざやかな、鋭い”など、たくましさを感じさせるため「たくましい子どもの因子」と仮に命名した。次に、信頼性の検討としてCronbachのα係数を求めた。その結果、イメージ項目全体は0.881、各因子では第1因子0.902、第2因子0.824、第3因子0.820、第4因子0.705、第5因子0.734であった(表2)。

4) 因子得点を用いた属性の比較

因子得点を用いて、対象者の属性ごとに比較を行った(表3)。

第4因子の「お利口な子どもの因子」にのみ有

意差が認められた。対象者の年齢では、30代と40代以上の者が20代の者より有意に高い値を示し(P<0.05)、子ども人数では、2人が1人より有意に高かった(P<0.05)。また、設置主体別では、その他の保育所が事業所内保育所で働く者より有意に高く(P<0.05)、病児保育の有無でも、病児保育を実施していない施設が実施している施設で働く者より有意に高かった(P<0.01)。

4. 考 察

少子化や核家族化の進行、女性の社会進出の本格化、就業形態の多様化、地域の子育て機能の低下など、近年、子どもをとりまく家庭・地域の環境は、大きく変化している。その変化に伴い、保育所の役割は更に重要度を増している。保育所の入所児童数は、少子化を背景に減少傾向にあった

表2 各因子のCronbachのα係数

イメージ項目		因子名	因子別α係数
6	柔らかい-硬い	女の子の因子	0.902
9	暖かい-冷たい		
5	うつくしい-みにくい		
12	豊かな-貧しい		
19	好き-嫌い		
8	楽しい-不愉快な		
2	あかるい-暗い		
3	うれしい-悲しい		
17	愉快な-不愉快な		
7	きれい-きたない		
14	賑やかな-静かな		
21	親しみやすい-親しみにくい	好感もてる子どもの因子	0.824
20	興味ある-無関心な		
26	かわいい-かわいくない		
25	動的な-静的な		
30	積極的な-消極的な	元気な子ども因子	0.820
22	激しい-穏やかな		
15	一時的な-永久的な		
28	派手な-地味な		
16	動物的な-人間的な		
23	粗野な-丁寧な		
18	軽い-重い	お利口な子ども因子	0.705
35	勤勉な-怠惰な		
34	速い-遅い		
24	わかりやすい-わかりにくい		
10	賢い-おろかな		
31	安定した-不安定な	たくましい子ども因子	0.734
1	やさしい-きびしい		
4	強い-弱い		
13	大きい-小さい		
32	複雑な-単純な	全体のα係数	0.881
29	あざやかな-淡い		
11	鋭い-鈍い		

が、最近では増加に転じている。これは、女性の高学歴化の影響で、仕事に価値を見いだす有職女性が増加し、特に0歳児などの低年齢児の入所児童数の伸長が著しくなった事が最近の特徴である¹¹⁾。保育施設の種類には、認可保育所とそれ以外の無認可保育所がある。近年は、認可保育所の不足や延長保育・夜間保育などの保護者のニーズに認可保育所が対応しきれていないことから、無認可保育所への入所が増えている。現在把握されている無認可保育所は、全国では9437ヶ所であり、長崎県では98ヶ所、入所児童数は2289人である(2000年12月31日現在)¹¹⁾。保育所の増加、低年齢児保育の拡充などで、保育士数も年々増加傾向にあり、全国では約26万人(1999年)に上っている。このような、変化が著しい状況下で働く保育者を対象に、保育者がもつ子どものイメージについて調査を行った。

今回の調査対象の年齢は、30代が16.9%と20代、40代以上より少なかった。わが国では、結婚や子育てのため、20代後半から30代前半の女性の労働力が低くなる、いわゆるM字カーブが特色¹³⁾といわれている。30代は育児中の女性が比較的多く、そのため他の年代より少なかったと考えられる。

今回の調査で使用した35対のイメージ項目の平均値を項目別に比較した結果、「興味ある、かわいい、好き、楽しい」などは得点が高かった。こ

表3 因子得点を用いた属性の比較

属性項目			Mean				
			第1因子 女の子の因子	第2因子 好感のもてる 子どもの因子	第3因子 元気な 子どもの因子	第4因子 お利口な 子どもの因子	第5因子 たくましい 子どもの因子
個人特性	年齢	20代 ⁽²⁹⁾ : 30代 ⁽¹²⁾	0.32 > -0.31	0.15 > -0.31	-0.08 < -0.05	-0.22 < 0.49*	-0.09 < 0.07
		20代 : 40代以上 ⁽²⁵⁾	0.32 > -0.06	0.15 > -0.09	-0.08 < 0.05	-0.22 < 0.25*	-0.09 < 0.08
		30代 : 40代以上	-0.31 < -0.06	-0.31 < -0.09	-0.05 < 0.05	0.49 > 0.25	0.07 < 0.08
	結婚	未婚 ⁽²⁹⁾ : 既婚と離婚 ⁽³⁹⁾	0.20 > -0.15	0.16 > -0.06	0.05 > -0.01	-0.21 < 0.21	-0.13 < 0.08
	子どもの有無	あり ⁽³³⁾ : なし ⁽³⁹⁾	-0.20 < 0.21	-0.14 < 0.16	-0.02 < 0.03	0.17 > -0.12	0.14 > -0.13
	子どもの人数	1人 ⁽³⁾ : 2人 ⁽²⁰⁾	-1.07 < -0.05	0.04 > -0.27	0.46 > -0.14	-1.18 < 0.30*	0.64 > -0.10
		1人 : 3人以上 ⁽¹⁰⁾	-1.07 < -0.24	0.04 < 0.08	0.46 > 0.09	-1.18 < 0.29	0.64 > 0.46
2人 : 3人以上		-0.05 > -0.24	-0.27 < 0.08	-0.14 < 0.09	0.30 > 0.29	-0.10 < 0.46	
職務年数	3年以下 ⁽²¹⁾ : 4~10年 ⁽²⁸⁾	0.21 > 0.02	0.12 > 0.03	-0.10 < -0.02	-0.25 < 0.23	-0.23 < 0.13	
	3年以下 : 11年以上 ⁽²⁰⁾	0.21 > -0.13	0.12 > -0.07	-0.10 < 0.15	-0.25 < 0.03	-0.23 < 0.13	
	4~10年 : 11年以上	0.02 > -0.13	0.03 > -0.07	-0.02 < 0.15	0.23 > 0.03	0.13 = 0.13	
資格の有無	あり ⁽⁵⁷⁾ : なし ⁽¹³⁾	-0.06 < 0.20	-0.05 < 0.21	0.00 < 0.12	0.03 > -0.15	0.04 > -0.28	
施設特性	設置主体	事業所内 ⁽²¹⁾ : その他 ⁽⁴⁸⁾	-0.11 < 0.00	-0.06 < 0.06	0.04 > -0.01	-0.45 < 0.23*	-0.17 < 0.07
	病児保育	あり ⁽¹⁴⁾ : なし ⁽³⁷⁾	-0.38 < 0.07	-0.11 < -0.02	0.11 < 0.24	-0.68 < 0.13**	-0.29 < -0.13
	延長保育	あり ⁽³⁷⁾ : なし ⁽¹⁶⁾	-0.07 < 0.38	-0.09 < 0.21	-0.19 < 0.21	0.10 > 0.09	-0.06 < 0.13
	保育形態	昼間 ⁽⁵³⁾ : 夜間 ⁽¹⁵⁾	0.09 > -0.46	0.01 > -0.02	-0.01 < 0.12	0.14 > -0.34	-0.06 < 0.20

* P<0.05

** P<0.01

()は人数を示す

れは、保育者が子どもに対して関心や愛情を持って接しているため、強くイメージされたと考えられる。逆に、「安定した、複雑な、動物的な」などの得点が低かったのは、子どもの心の不安定さや人間的な面を保育者がしっかりとらえていたことがこれより伺える。また、イメージ項目の中央値である4点より高い項目は34項目あり、保育者が子どもの特徴を肯定的にとらえていることがわかった。

イメージ項目の関連性を検討するために、因子分析を行った結果、無認可保育所で働く保育者の意識構造として、5つの因子が抽出された。どのイメージ項目も正の因子負荷量を示し、この結果からも保育者は肯定的なイメージを抱いていたことが示唆された。これは、保育者が子どもの本来の性質を現実的に受け止め、イメージしている者が多いためと考えられる。信頼性の検討では、イメージ項目全体の Cronbach の α 係数は0.881と高く、各因子でみると第1因子は0.90以上の理想水準を示し、第2・3因子は0.75以上の許容水準、第4・5因子は保留水準 ($\alpha > 0.50$) を示した。これより、今回の調査票には信頼性があると示唆された。

次に、因子得点を用いて因子ごとに属性の比較を行った。第4因子の「お利口な子どもの因子」にのみ有意差がみられ、対象者の年齢では30代・40代以上の者が20代に比べて有意に高い値を示した。また子どもの人数では、2人の子どもをもつ者が、1人より有意に高かった。年齢の高い者ほど子どもを多くもち、保育者としての職務年数も長い。そのため、それらは20代や1人の子どもをもつ者より子どもの扱いにも慣れ、子どもの頻繁な行動の変化に落ち着いて対応し、どのような子どもに対しても戸惑うことなく、扱いやすい子、すなわち「お利口な子ども」というイメージを抱いたと考えられる。設置主体別の比較では、その他の保育所が事業所内保育所で働く者より有意に高い値を示した。今回の事業所内保育所は、病院内に併設された施設であり、医療に携わる親が子どもを入所させている。病気に対して知識をもつ親を相手に、その子どもたちを世話することは、保育者にとってけがや病気の知識に不安をもつため、精神的な負担は大きい。そのため、その他の保育所で働く者が、事業所内保育所で働く者より「お利口な子ども」のイメージを強くもったと考

えられる。病児保育の有無では、病児保育を実施していない施設で働く者が、実施している者より有意に高い値を示した。病児保育を実施していない施設で働く者は、子どもの健康状態の観察や病気への対応という点で病児保育を実施している者より神経質になる必要がなく、精神的負担も少ない。その結果、その他の保育所で働く者と同様に世話をしやすい「お利口な子ども」のイメージが強くなったと考えられる。

保育所は、「保護者に変わる保育」という目的から、母親の職場進出を軸に、乳幼児に対する養育と教育の重要性の認識が深まり、拡大されてきた。今日、保育所に求められる役割は、①乳幼児をもつ父母が安心して働けるようにすること、②乳幼児期に必要な豊かな保育を保障すること、③地域の子育て支援センター的機能を発揮することと考えられている。保育所では、「保育所保育指針」に基づいて、1日8時間の保育が行われており、保育を主としているが、内容には教育も含まれ、教育レベルでは幼稚園と変わらない¹⁴⁾。働く母親からは、0歳児保育、長時間保育、宿泊保育、病児・障害児保育への要求が高く、保育者への負担がますます大きくなっている。今回の結果では、保育者がもつ子どものイメージとして、肯定的な表現が多かった。しかし、今後の保育所形態の変化とともに、保育者の業務内容や子どもに対する責任はますます増大する。その結果、彼らが抱く子どものイメージにも変化が現れると考えられる。否定的な子どものイメージが増大しないよう、子どもにとって住みやすい保育環境を、今後も続けて提供したいと考える。

5. まとめ

1. 無認可保育所で働く保育者71名に、子どものイメージについてアンケート調査を行い、保育者との関連要因を明らかにした。
2. 子どものイメージの平均得点が高い項目は、「興味ある」「かわいい」「好き」「楽しい」などで、保育者が子どもに対して愛情をもって接していることが伺えた。
3. 子どものイメージについて因子分析を行った結果、「女の子の因子」「好感もてる子どもの因子」「元気な子どもの因子」「お利口な子どもの因子」「たくましい子どもの因子」の5因子

が抽出され、保育者は肯定的なイメージを抱いていた。

4. 因子得点を用いて対象者の属性を比較した結果、第4因子の「お利口な子どもの因子」では、対象者の年齢と子どもの人数、設置主体別、病児保育の有無で有意差がみられた。

おわりに

女性の社会進出の増大、少子化、核家族化など社会の変化に伴い、子どもを取り巻く環境はますます厳しいものとなっている。その中で、地域サポートシステムは重要度を増し、親にとって保育所は、今まで以上に必要不可欠となる。そのような環境の中で働く保育者は、子どもに対して肯定的なイメージをもつことが今回示唆された。

この調査を行い、一部地域の保育者が抱く子どものイメージの概要は把握された。しかし、今回は対象者の人数も少なく、調査地域も限定されていたため、明確な結果は得られなかった。今後も、調査を重ねて対象数を増やし、幅広い領域で子どもと接する職種の人々を対象に、子どものイメージの違いや変化について調査し、子どもと社会の啓蒙活動に役立てたいと考える。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、ご協力下さいました保育者の皆様に、深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 高橋由起子・杉浦浩子・竹内淑子：小児看護実習が学生の子どものイメージ形成に及ぼす影響，岐阜大学医療短期大学部紀要，7(2)，77-88，2001
- 2) 市江和子：看護学生の子どものイメージに関する研究（その1）-看護学生と保育学生の比較-，日本看護研究学会雑誌，24(3)，391，2001
- 3) 加藤奈保美・内海滉：看護学生の子どものイメージの研究（その2）-保育イメージとの関係-，日本応用心理学会論文集，62，2000
- 4) 高橋由起子・杉浦浩子・竹内淑子：看護学生の子どものイメージと関連要因-学生の背景による比較-，岐阜大学医療短期大学部紀要，7(1)，21-32，2000
- 5) 市江和子：小児看護において看護学生が子どもに対してもつイメージの変化-小児看護学実習の前後におけるイメージ形成要因-，日本赤十字愛知短期

大学紀要，10，47-54，1999

- 6) 高橋紀子・内海滉：看護学生の子どもの時代の自己像と看護学生の子どものイメージとの関連，日本看護研究学会雑誌，22(3)，204，1999
- 7) 中林雅子・松村恵子：小児看護実習における看護学生の子どものイメージの変化-看護学生の子どもの関係形成にむけての一考察-，日本看護研究学会雑誌，22(3)，205，1999
- 8) 草野美根子・今福ひとみ，他：看護学生のもつ子どものイメージ形成過程-小児看護学の講義と臨床実習との関連-，日本看護研究学会雑誌，22(3)，206，1999
- 9) 大西文子・浅野みどり：看護学生の子どものイメージと小児看護実習評価との関連-学生の自己評価を中心に-，日本看護研究学会雑誌，21(3)，357，1998
- 10) 草野美根子・寺田敦子，他：小児看護実習における看護学生の子どものイメージの変容-病棟実習と保育園実習の因子分析的検討-，第28回日本看護学会集録（看護教育），143-145，1997
- 11) 全国保育団体連絡会・保育研究所，編：保育白書，草土文化，8-281，2001
- 12) 中淑子：子どもに対するイメージの比較-看護学生と保育科学生の比較-，日本応用心理学会論文集，102，1990
- 13) 母子保健研究会：わが国の母子保健，38，1999
- 14) 森林：ちょっと変わった幼児学用語集，北王子書房，160，1998

参考文献

- 1) 谷本公重・猪下光，他：看護学生の幼稚園・保育園実習前後における子どもへの認知とイメージの変化，香川医科大学看護学雑誌，3(2)，7-14，1999
- 2) 牛澤美恵子・北島靖子：小児看護実習における子どもに対するイメージの変化とその変化に影響を与える実習条件，順天堂医療短期大学紀要，6，14-24，1995
- 3) 渡辺保博：「長時間保育」と保育の制度・内容・運動-1960年代後半から1970年代半ばにおける民間保育研究団体の模索と実施から-，保育の研究，17，31-51，2000
- 4) 安梅勅江・呉裁喜：夜間保育の子どもへの影響に関する研究，日本保健福祉学会誌，7(1)，7-18，2000
- 5) 丸山昭子・安梅勅江：夜間保育サービスの今後の課題に関する研究，日本保健福祉学会誌，7(1)，41-47，2000
- 6) 山本真実：初の「全国子育てマップ」作成，母子保健情報，39，97-101，1999
- 7) 小林登：子ども学，日本評論社，1999